

あとがき

専修大学スポーツ研究所の新たな門出

専修大学スポーツ研究所 所長

佐竹 弘靖

平成最後となる2018年度版専修大学スポーツ研究所報を発行できること誠に嬉しく思います。

専修大学スポーツ研究所が毎年主催するシンポジウムでは、今回、これまでのテーマである「オリンピック・パラリンピックのレガシー」から若干視点を変えて「日本サッカーはW-CUPで何を学び、何を継承していくのか」のタイトルで開催しました。シンポジストはサッカージャーナリストの後藤健夫氏、元NHKエグゼクティブアナウンサーで法政大学教授の山本浩氏、W-CUP5大会連続サッカー日本代表コンディショニングコーチの早川直樹氏、元日本代表でサッカー解説者の北澤豪氏、アトランタ・オリンピック韓国代表で専修大学法学部准教授の李宇ヨン氏5名の皆さんで、多角的な視点から日本サッカーの過去・現在・未来を熱く語っていただいた。サッカーファンでなくとも時間を忘れて聞き入ってもらえたものと思います。

また、専修大学スポーツ研究所が毎年行う研修会では、2019年1月23日から24日にかけてプロ野球パ・リーグの福岡ソフトバンクホークスが本拠地としているヤフオクドームをはじめ、九州産業大学や東福岡高校を訪れました。ヤフオクドームでは福岡ソフトバンクホークスの事業統括本部、事業運営本部部長代行の大山隆太氏より、低迷気味であった人気を向上させ、観客動員数の増加にむすびつけるために、これまでどのような対策を打ち出し、成功に導いてきたかをスポーツ・ビジネスやスポーツ・マネージメントの観点から有意義なお話をいただきました。スポーツに力を入れて多く種目で優秀な成績を残し、有名選手

を多数輩出している九州産業大学と東福岡高校では、その施設の充実ぶりや指導体制の素晴らしさ、さらには学校当局のバックアップ体制などを見聞するよい機会となりました。

昨年開催20回を迎えたスポーツ公開講座は、今年も多く多くの近隣住民の方々に参加していただき週1回ではありますが、楽しい時間を過ごすことができました。さらに、「子どもにおける“からだ”と“うごき”と“こころ”づくり教室」と題するスポーツ講座ではレスリングを教材として週3回実施してまいりました。どちらも好評で今後も継続して行なって参ります。

2020年、東京オリンピック・パラリンピックを迎える我が国のスポーツ界に目を向けてみましょう。

30年の歴史に幕をおろす平成の時代に、7回のオリンピック・パラリンピックが開催されました。日本選手の大活躍や思わぬ敗北に一喜一憂した国民はどれほど多いことでしょうか。その反面、スポーツ界において絶えることのない不祥事や暴力問題で失望し、スポーツ自体に幻滅した人も多いにちがひありません。スポーツのあるべき姿とは何かをあらためて考えさせられる30年ではなかったでしょうか。新元号を迎える我が国のスポーツ界が新たな一歩を踏み出す最大のイベントが2020東京オリンピック・パラリンピックであることは言うまでもありません。専修大学スポーツ研究所の所員の多くは、この2020東京オリンピック・パラリンピックに深く関わっております。必ずや成功に貢献していただけるものと確信しております。

世の中は猛スピードでIT化が進んでおります。その波にスポーツ界も大きく影響を受けていることは疑う余地はありません。今後、「先端技術とスポーツ」が話題となる機会がより一層増えてくるでしょう。

eスポーツ(エレクトロニック・スポーツ)は、現在のスポーツ界にどのように関わってくるのでしょうか。AI(人工知能)の発達はどうでしょう。スポーツ倫理に深く影響を及ぼしはしないでしょうか。数え上げればキリがありません。

私たち専修大学スポーツ研究所所員一同は、これから起こるであろう社会の変化、スポーツ界の変化にいち早く対応しながらトップアスリートへの技術的、心理的サポートを行うのはもとより、一般の学生や地域の住民の皆様により豊かで実りあるスポーツライフを提供できるよう研究・教育に尽力して参る所存です。

専修大学スポーツ研究所は、1969(昭和44)年7月5日、専修大学体育研究会として発足しました。2019年は本研究所が創立50周年を迎える記念すべき年となります。

研究所設立に尽力された先人の貢献を讃え、その足跡を辿りつつ、次なる50年のスタートを踏み出すべく現所員一同心新たに邁進して参ります。

最後になりますが、専修大学スポーツ研究所の運営にあたり大学より多大なご支援を賜っていること深く感謝し、御礼申し上げます。